

あべちゃん、何かついてるよ

作さとうりさ

今朝もいつもの場所にあべちゃんがいた。

あべちゃんはまた泣いていたみたいで、足もとには「涙たまり」をこしらえていた。だから僕はいつもどおり聞いてあげたんだ。

「どうしたの？」

そしたらあべちゃん、僕が「の？」という言葉を言い終わらないうちに
お決まりの台詞を喋りだした。

「ほら、ボクはみんなよりビンカンだろ？」

世の中で起きているどんな小さなことにも気が付いてしまって、
いろんなことが心配で心配でしかたがないんだよ。

それにね、ボクはみんなより、ずうっと小さいだろ？

だから悲しい気持ちがあるとすぐに全身にいきわたってしまって、動けなくなるんだ」
言い終わると同時に、あべちゃんはゆっくりと僕のほうに顔を向けた。

見ると、口の周りにドーナツ（チョコ味）の食べかすをやっぱり付けていた。

「付いてるよ」

結局、僕は今日も言えなかった。

用意していたハンカチも出せずじまい。

だって、それを言ってしまったら、ビンカンなあべちゃんが恥ずかしさのあまり悲しくなって、
大好きなドーナツ（チョコ味）をムシヤムシヤできなくなるんじゃないかって、それが心配なんだ。
あべちゃん、

僕だつてとても小さなことに気が付いてしまうし、

僕にだって心配で心配でしかたがないことがあるんだからね。

だから明日もまた聞くから。

「どうしたの？」